

明日の川西を担う子どもたちを健やかに育むために

平成19年度

「全国学力・学習状況調査」調査結果報告書

《中学校》

【概要版】

平成20年3月

川西市教育委員会教育振興部学校教育室

はじめに

川西市基礎学力向上検討委員会委員長

大阪教育大学 教授 田中博之

文部科学省が2007年4月24日に行った第一回全国学力・学習状況調査の結果が、昨年10月下旬に全国一律に各学校へ返却された。今回の調査の最も重要な意義は、それが悉皆調査として行われたことにある。そのねらいは、各学校に返却された調査結果から、各学校が自校の児童生徒の学力実態を具体的かつ客観的に診断して、それを活かした学力向上アクションプランを作成し、さらにそのアクションプランで示された方向性に沿って各学校が自校の実態に即したきめ細かな授業改善に取り組むことなのである。

したがって、文部科学省の学力調査に基づいた学力向上教育の実施は、まさにこれからが正念場であり、各学校での「学力向上のPDCAサイクル」を早急に開始する必要がある。そのために必要となる診断分析とその結果の活用の方について、次の三つのポイントを上げておきたい。

一つめは、「豊かな学力の確かな育成」をスローガンとして、教科学力の知識・理解に関わる基礎・基本を問う問題Aだけでなく、教科学力の活用力を問う問題B、さらに、児童生徒質問紙調査の結果についても幅広く分析することである。

二つめは、市町村教育委員会が各学校に返却した市町村内の全体的な状況をしっかりと把握して、自校の位置付けを捉えるとともに、そこで示された教科学力と質問紙調査の項目間のクロス分析結果を精査して自校の教育活動の改善ポイントを洗い出すことである。

三つめは、このような診断・分析結果を基に

して、自校の学力向上アクションプランを作成し、今後の授業改善に活かすことである。

そして、各学校で学力向上アクションプランを作成する際に大切なことは、あくまでも今回の調査結果が示す全体的な状況の中での自校の相対的な位置については、一喜一憂する必要はないことである。特に、市町村の平均値より多くの領域で低い結果が出た学校においては、今後の学力向上教育の推進に対して悲観的になったり、そうした学力向上のスタートラインの違いを嘆いたりすることなく、そこから一歩でも踏み出すために、自校において学力向上のための取り組みをいかに豊かにそして効果的に実施していくかなのである。各校に対する学校の外部評価や保護者からの学校に対する成果意識は、各学校での学力向上の取り組みの充実度にかかっているとよい。

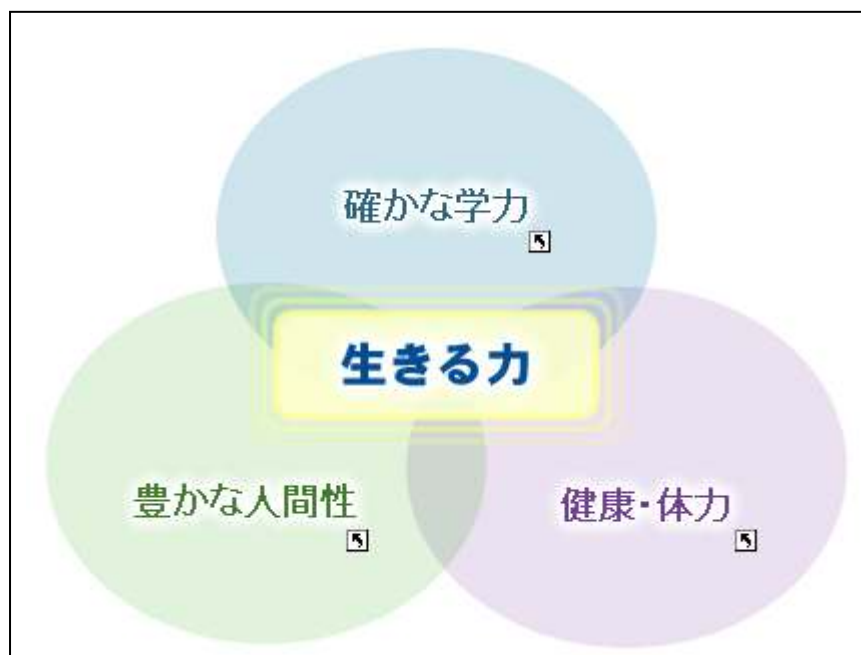
したがって、学力調査に基づく自校の学力向上は、自校の児童生徒が持つ固有の学力実態に応じた手作りの教育改革でなければ効果はない。これから学力診断に基づく各学校でPDCAサイクルを実施することが、すべての学校を「成果を出す魅力と活力あふれる学校」へ創り変える真の近道なのである。川西市においても、本報告書を元にした手作りの特色ある学力向上教育が推進されることを心から期待したい。

第1章 川西市としての基礎学力についての考え方

変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには、[生きる力]、[確かな学力]を育む必要があります。

[生きる力]とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい**[確かな学力]**、**[豊かな人間性]**、「**健康と体力**」の3つの要素からなる力

[確かな学力]とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの



このように、教育に求められているのは、生涯にわたる学習の基礎を培うという観点に立って、子どもに基礎的・基本的な内容を確実に身につけさせ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力（確かな学力）、自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性（豊かな心）たくましく生きるための健康や体力（健やかな体）などの「生きる力」を育むことです。

川西市においても、主に学校においてはぐくむべき能力として「確かな学力」という「生きる力」の知的側面のみならず、「豊かな心」「健やかな体」も含めた全人的な学力を「基礎学力」と定位したいと考えます。

1. 「確かな学力」の育成

学ぶ意欲や知的好奇心を育て「確かな学力」を育成することは、学校教育の基本的な役割ですが、基礎的・基本的な知識・技能の育成（習得型学力）と自ら学び自ら考える力の育成（探求型学力）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両者を総合的に育成することが必要であると考えます。また、そのためには

- ① 基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させる
- ② 知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する
- ③ ②をもとに実際に課題を解決する活動（探求的な活動）を行う

ことが必要です。

これらは、決して一つの方向で進むだけではなく相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えられます。知識・技能の活用が定着を促進したり、探求的な活動が知識・技能の定着や活用を促進したりすると考えられるからです。

- ① については、「読み・書き・計算」などの基本的な知識・技能の面については発達段階に応じて徹底的に習得させ、学習の基盤を構築していくことが大切であると考えられます。音読や暗記・暗唱、反復学習などを通じて知識・技能の体験的、身体的な理解に配慮する必要があるでしょう。ただ、その際も知識・技能を実際に活用する力の育成を視野に入れることが重要です。知的好奇心に支えられ実感を伴う理解があつてこそ生きて働く学力として機能するものと考えます。
- ② については具体的には思考力・判断力・表現力等を育み、知識・技能等を学習や生活において生かし総合的に働かせることを目指しているといえるでしょう。こうした方向性は国際的にも模索されており、顕著なものにOECDのPISA調査の枠組みの基盤となっている「キー・コンピテンシー」の概念があります。すべての個人にとって、知識・技能だけでなく技能や態度を含む様々な心理的・社会的な資源を活用して、重要で有益な特定の文脈の中で複雑な課題に対応する力とされています。
- ③ については体験から感じ取ったことを感性や想像力を生かして表現する活動や情報を活用し思考し処理する活動、①②で獲得した知識・技能を活用する活動、課題探求や課題解決を学習構想しながら行なう活動などが考えられます。

2. 「豊かな心」と「健やかな体」を育み社会的自立の基礎を培う

学力低下傾向の一つの原因として子どもの学習意欲や学習習慣の問題が指摘されています。また、今日、子どもたちは、社会と豊かに関わる機会をもてなくなりつつあり、協調性・責任感・権利意識などをもちにくくなっているといわれています。基本的な生活習慣とともに社会生活を送る上で最低限の規範意識や倫理観などの道徳性、人生をより豊かにするための感性や想像力、心身の健康の保持・増進のために必要な知識・習慣や生活を改

善する力などは「確かな学力」を育成する上でも重要なファクターであると考えられます。

先述の「確かな学力」が社会の中で実感を伴って機能し活用されていくための情意的・身体的側面としての学力を「豊かな心」「健やかな体」としてとらえたいと考えています。

すなわち、個々の子どもの自己実現を志向しない空虚な学力は基礎学力として定位できないということです。

3. 「基礎学力」向上のための指導

「基礎学力」が扱うべき基礎的、基本的な内容は教育課程の国家基準（学習指導要領）でもとめている内容であることは疑いようのない事実ですが、指導事項を個々の学級で子どもの学習に翻訳し、価値ある活動に仕組むのは教師であることもまた、疑いようの無い事実です。特に今までと変わったことというのではなく、基礎的な内容を子どもの学習に還元していく活動を丁寧にしていくことがキーになります。

- ① 当面する教材や題材について一人ひとりの子どもが豊かなイメージを持ち自分なりの実感と結びつけることができる学習課題の設定
- ② 一人ひとりの子どもが学習活動の目標について理解し、目的意識を持って学習する手立ての工夫
- ③ 子どものつまずきを的確に判断し当面の学習の障害を取り除く学習支援
- ④ 子どもの固定観念や既成概念、不活性な興味・関心をゆさぶり活性化させるための手立て
- ⑤ 学習の中で扱う知識・理解、技能などの事項について子どもの側に立ったまとめを構造的に行い、ポイントとなる点については繰り返し念を押し、一人ひとりに定着を図る
- ⑥ 子どもが学習成果を自覚し適切に自己評価し、効力感、有用感を持てるような課題提示、評価の工夫

などは、特別なことではないと感ぜられるでしょうが、上記の「知識・技能を実際に活用する力の育成」には欠かせないと考えられます。また、「学習意欲や学習習慣」「責任感や協調性」などの豊かな心を育む際にも大切な視点となるでしょう。

従来の一斉指導の方法に加えて、習熟度別指導や少人数指導、発展的な学習や補充的な学習などの個に応じた学習も適切に実施していくことも大切であると考えます。

第2章 川西市における学力等の実態

(1) 平成19年度全国学力・学習状況調査実施概要 (川西市)

1. 調査対象

- (1) 市内全小学校第6学年・特別支援学校小学部第6学年の児童
- (2) 市内全中学校第3学年・特別支援学校中学部第3学年の生徒

2. 調査内容

(1) 小学校第6学年

- ①実施教科等 「教科に関する調査(国語、算数)」、「生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査」
- ②実施日 平成19年4月24日(火)
- ③実施時間 国語A(20分)、算数A(20分)、国語B(40分)、算数B(40分)、児童質問紙(40分)
- ④実施人数 1406名

(2) 中学校第3学年

- ①実施教科等 「教科に関する調査(国語、数学)」、「生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査」
- ②実施日 平成19年4月24日(火)
- ③実施時間 国語A(45分)、国語B(45分)、数学A(45分)、数学B(45分)、生徒質問紙(40分)
- ④実施人数 1161名

主として「知識」に関する問題 [国語A, 算数・数学A]	主として「活用」に関する問題 [国語B, 算数・数学B]
<ul style="list-style-type: none"> ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力などにかかわる内容 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容 <p style="text-align: right;">など</p>

(2) 中学校 調査結果の概要【国語】【数学】

【国語】

○調査問題の趣旨・内容

国語A－基礎的・基本的な言語活動や言語事項に関する知識・技能が身に付いているかどうかをみる問題。

国語B－基礎的・基本的な言語活動や言語事項に関する知識・技能を活用することができるかどうかをみる問題。

○調査結果

(全国平均)

中 学 校	国語A	国語B
	81.6%	72.0%

○中学校国語A（知識）については、全国平均同様、相当数の生徒が今回出題している学習内容をおおむね身に付けていると考えられる。

○中学校国語B（活用）については、全国平均同様、知識・技能を活用する力をさらに身に付ける必要がある。

○課題等

話すこと・聞くこと

◇(A) 聞き手を意識して使用する語句を工夫することや不足している情報を適切な表現で話し手に確かめることは、相当数の生徒ができています。

書くこと

◇(A、B) グラフから必要な情報を読み取って記述すること、文学作品の内容や構成について自分の考えを書くことについては、相当数の生徒ができています。

◆(A) 手紙の後付けの書き方についての理解に課題がある。

◆(B) 複数の資料から得た情報を整理して、伝えたい事柄や自分の考えを明確にして書くことに課題がある。

読むこと

◆(A) 情景描写を書き手の工夫に着目して的確に読み取ることに課題がある。

◇(B) 文章全体の内容や表現の特徴についておおまかに読み取ることは、相当数の生徒ができています。

◆(B) 文章の展開や心情の変化に着目して、工夫しながら朗読することに課題がある。

言語事項

◇(A) 語句の意味を理解して文脈の中で正しく使うこと、文の成分の照応に注意して書くこと、生活の場面で敬語を適切に使うことは、相当数の生徒ができています。

◆(A) 文脈に即して漢字を正しく読んだり書いたりすることに課題がある。

【数学】

○調査問題の趣旨・内容

数学A－数量や図形などについての基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているかどうかをみる問題。

数学B－数量や図形などについての基礎的・基本的な知識・技能を活用することができるかどうかをみる問題。

○調査結果

(全国平均)

中 学 校	数学A	数学B
	71.9%	60.6%

○中学校数学A（知識）については、全国平均同様、基礎的・基本的な知識・技能をさらに身に付けさせる必要がある。

○中学校数学B（活用）については、全国平均同様、知識・技能を活用する力に課題がある。

○課題等

数と式

◇(A) 指数を含む計算、式の値を求めること、一元一次方程式を解くことは、相当数の生徒ができています。

◆(A) 文字式が表す意味の理解や方程式における移項の意味の理解に課題がある。

◆(B) 結論が成り立つことを説明するために必要な条件を示すことに課題がある。

◆(B) 条件に合う式を見だし、文字式を用いて表し説明することに課題がある。

図形

◇(A) 基本的な平面図形の性質の理解については、相当数の生徒ができています。

◆(A) 円柱と円錐の体積の関係の理解に課題がある。

◆(B) 仮定と結論の意味を理解して証明の構想を立てることに課題がある。

数量関係

◆(A) 反比例の表を完成させることに課題がある。

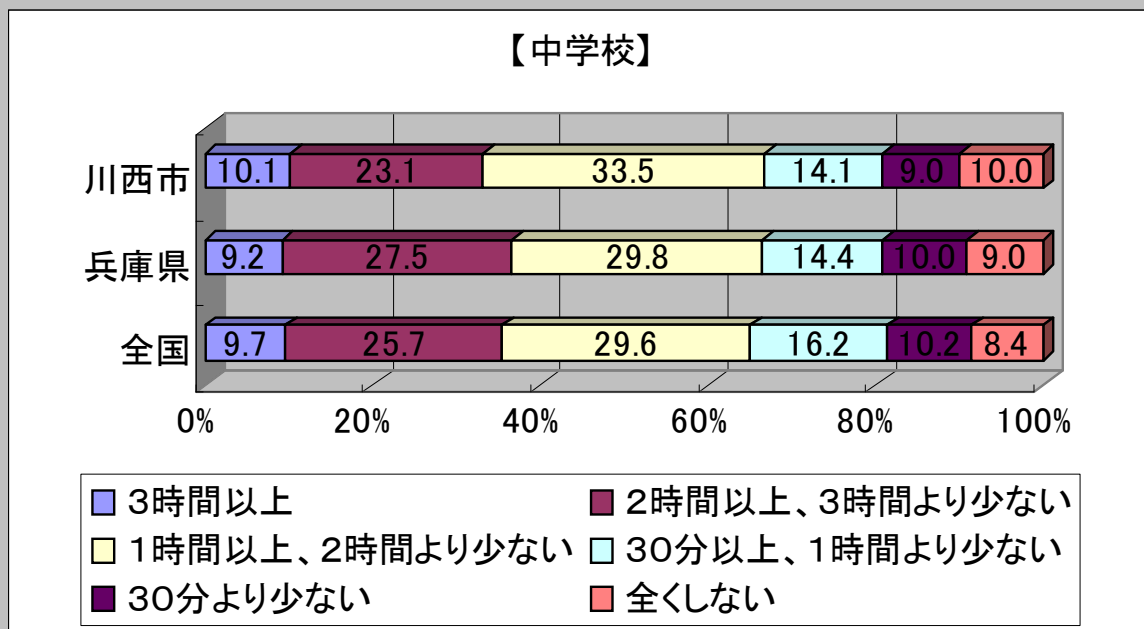
◆(A) 確率の意味の理解に課題がある。

◇(B) 説明すべき事柄を正しく選択し判断することは、相当数の生徒ができています。

◆(B) 数量の関係を理想化したり、実際のデータを単純化したりして数学的に表現することに課題がある。

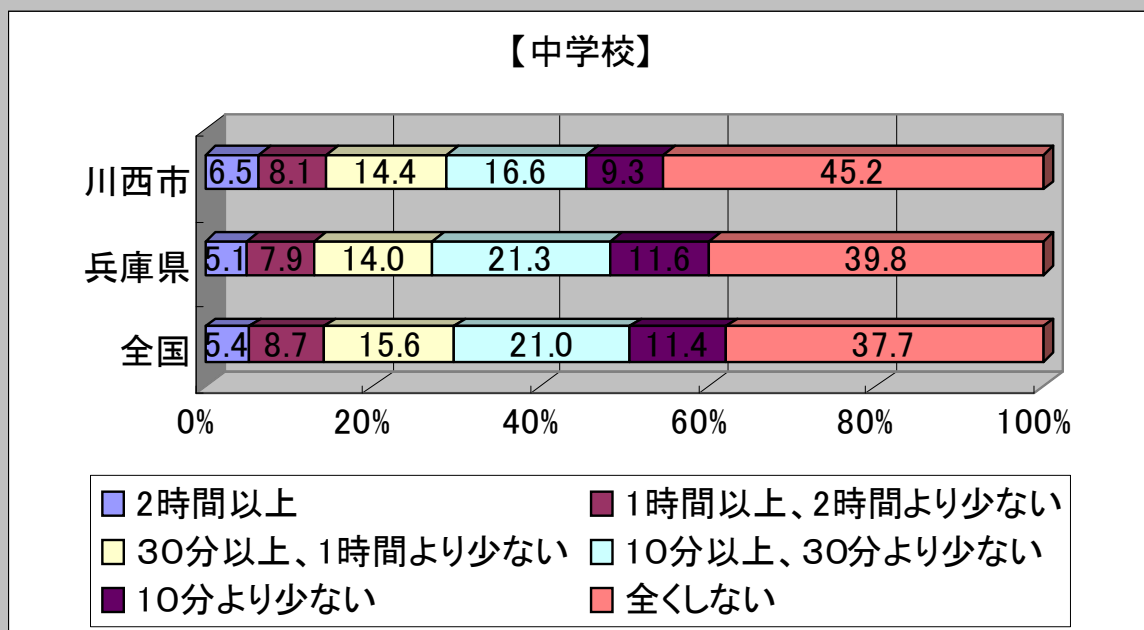
*** 学習時間等**

○学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか



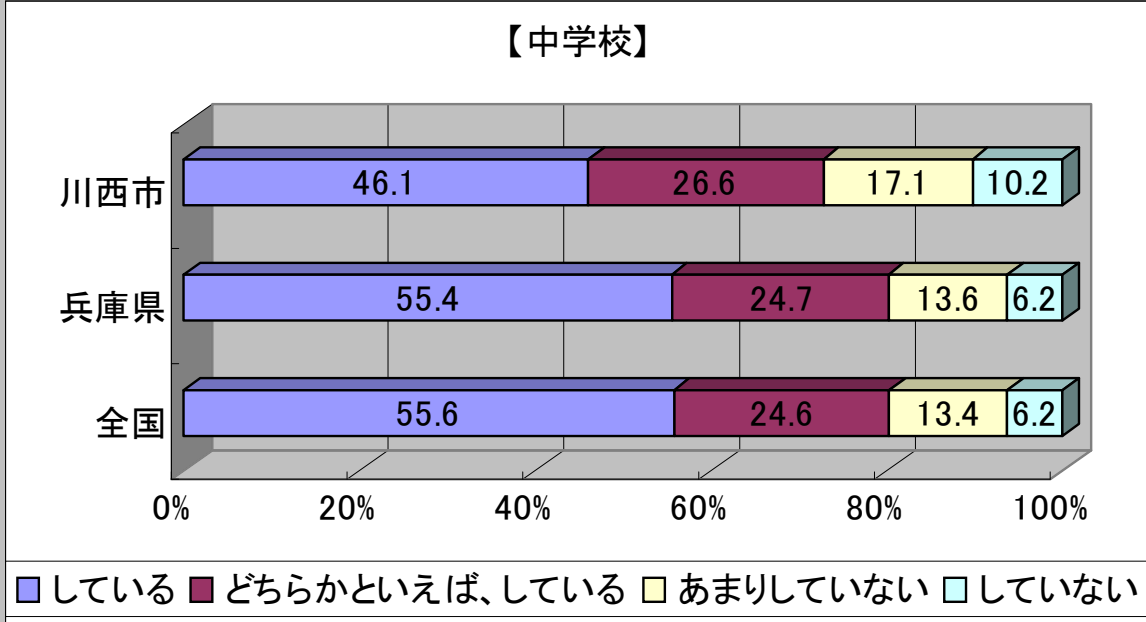
*** 学習時間等**

○家や図書館で、普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、読書をしますか



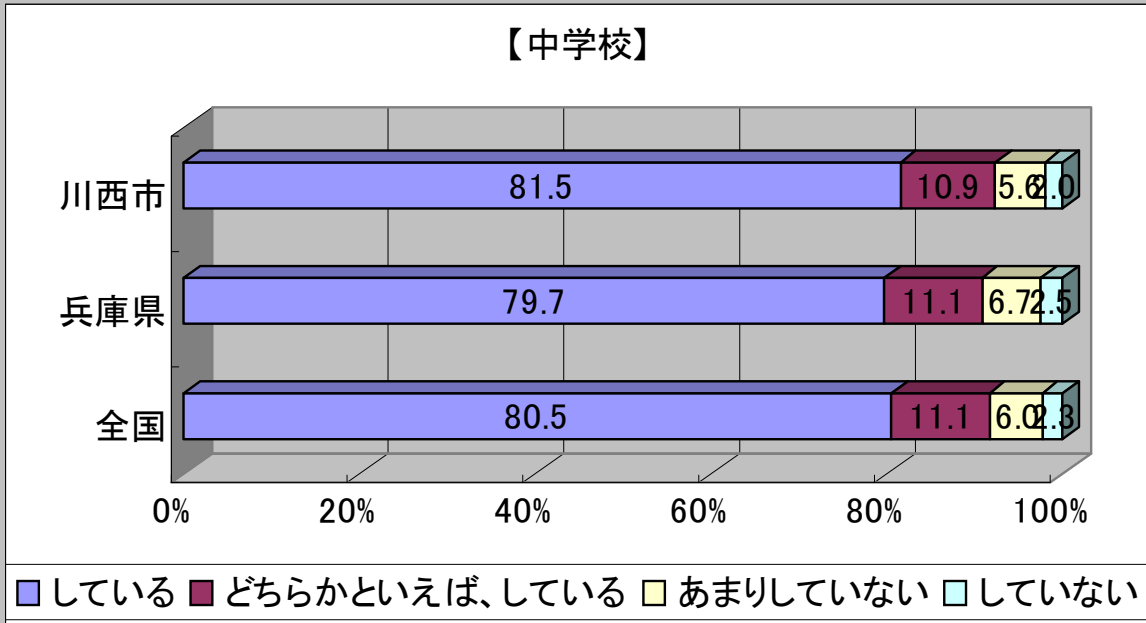
*** 学習時間等**

○家で学校の宿題をしていますか



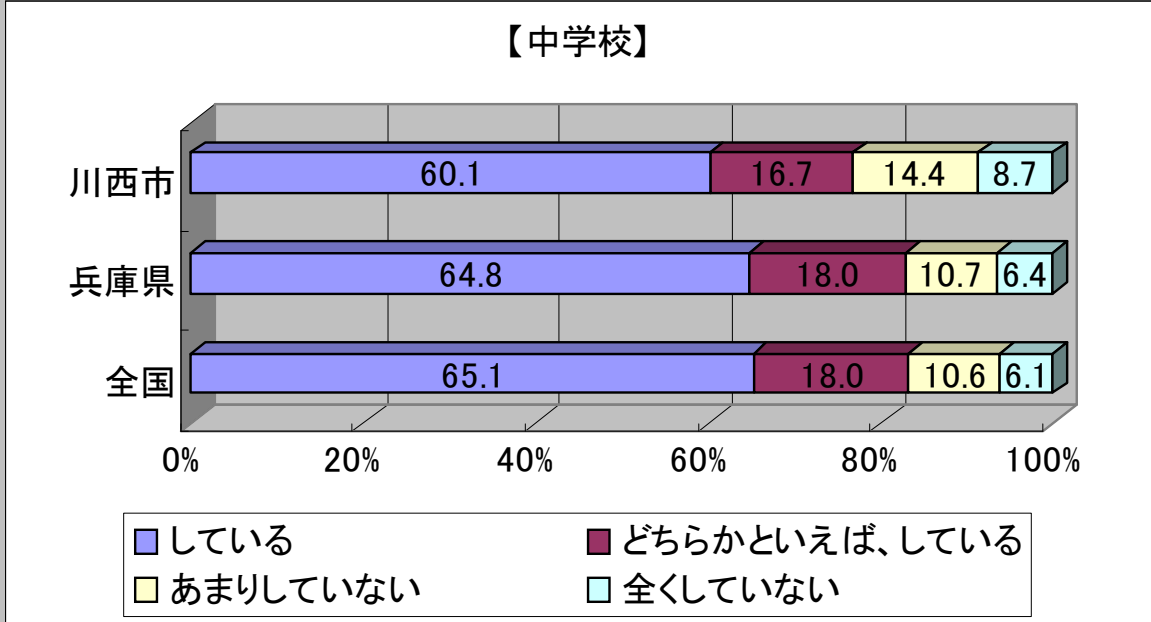
*** 基本的な生活習慣**

○朝食を毎日食べていますか



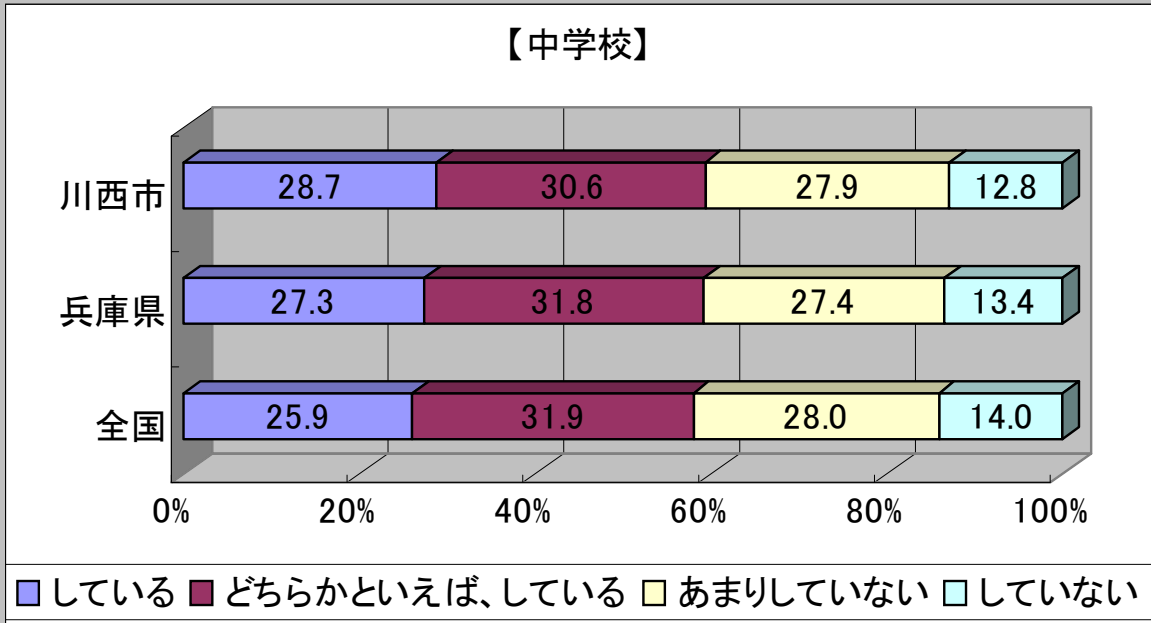
*** 基本的な生活習慣**

○学校に持って行くものを、前日か、その日の朝に確かめていますか



*** 家庭でのコミュニケーション**

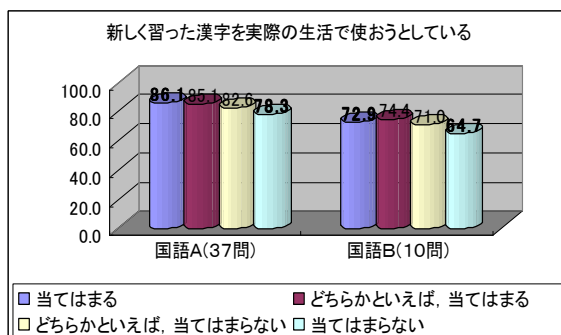
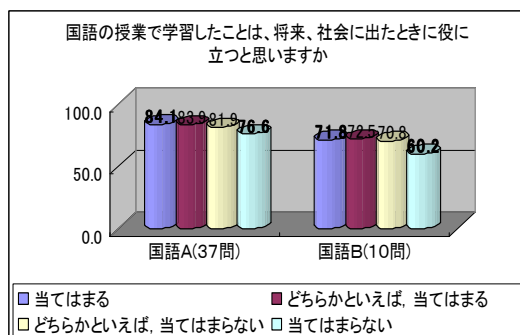
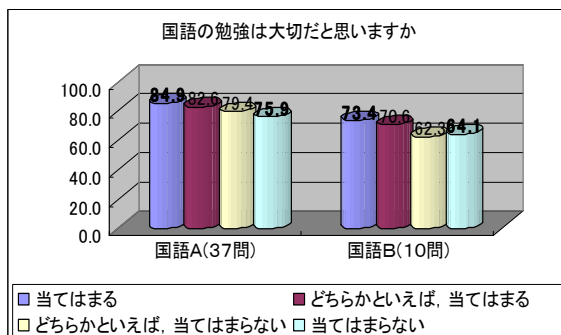
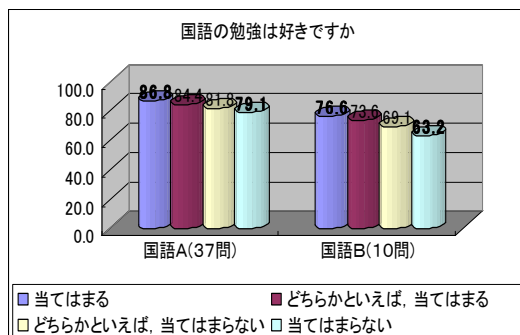
○家の人と学校での出来事について話をしていますか

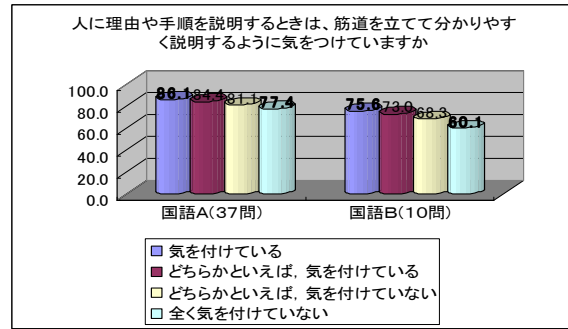
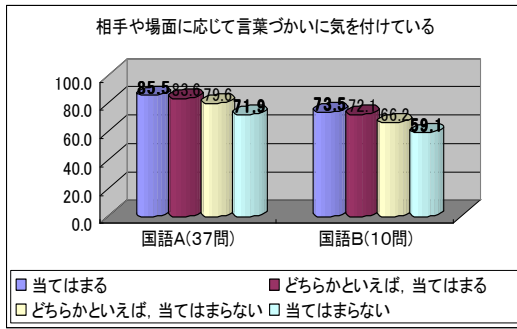


(7) 生徒質問紙調査結果と正答率との相関関係

* 国語

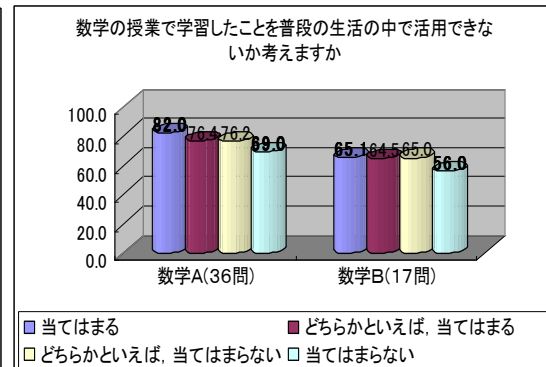
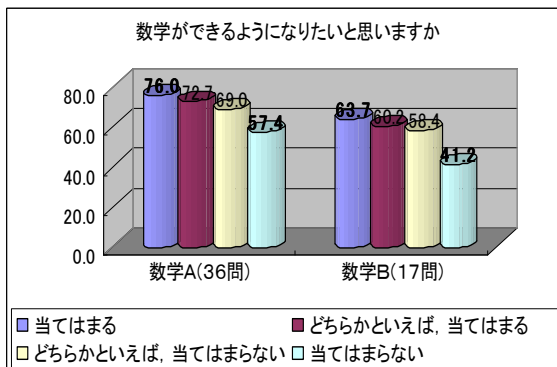
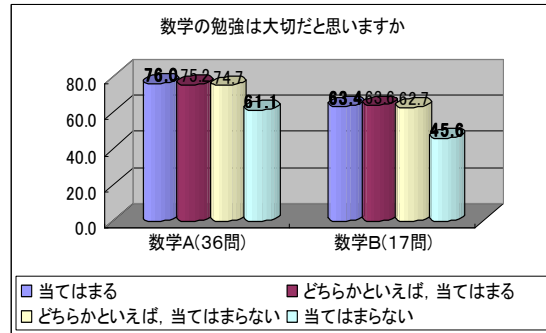
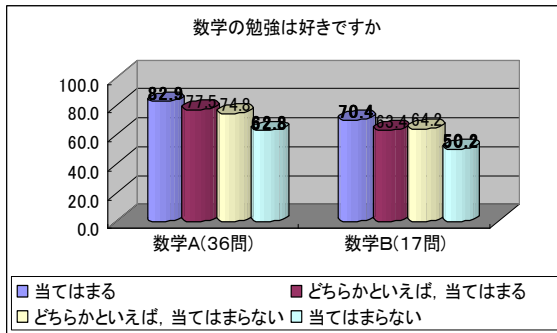
- 国語の勉強が好きな生徒、国語の勉強が大切、役に立つと思う生徒の方が、国語の正答率が高い傾向がみられる。
- 新しく習った漢字を実際の生活で使おうとしたり、相手や場面に応じた言葉づかいに気をつけたりしている生徒の方が、国語の正答率が高い傾向がみられる。
- 人に理由や手順を説明するときは、筋道を立てて分かりやすく説明するように気をつけている生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。
- 国語の授業で自分の考えを話したり書いたりしている生徒の方が、国語の正答率が高い傾向がみられる。

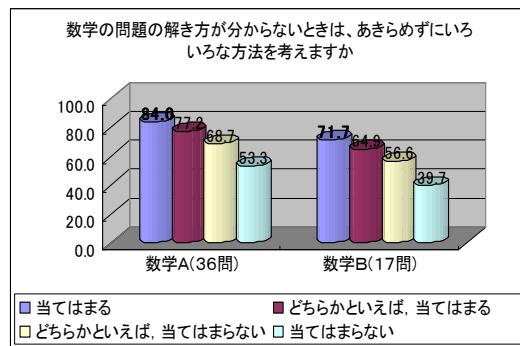
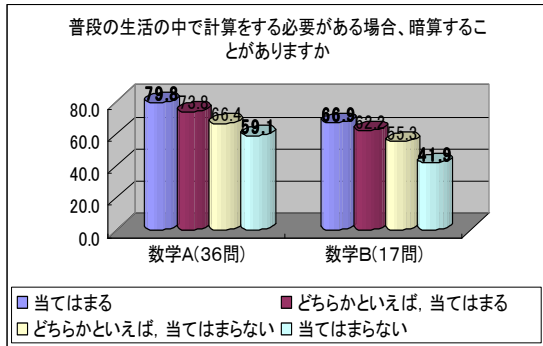




* 数学

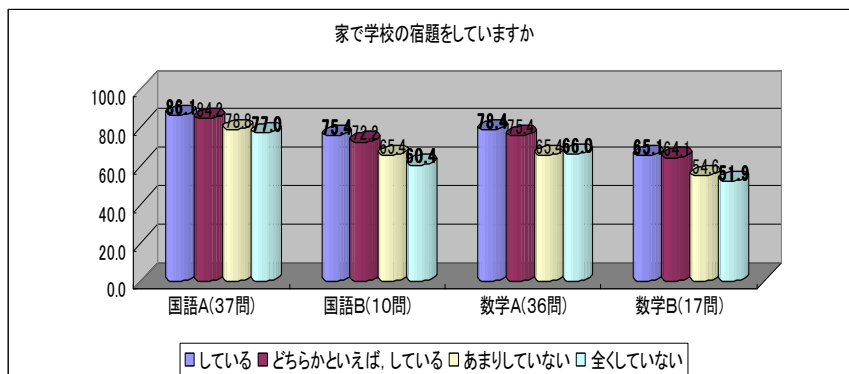
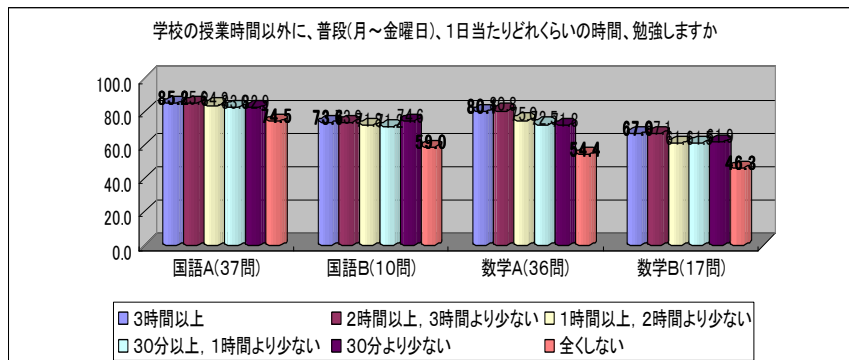
- 数学の勉強が好きな生徒、数学の勉強が大切、数学ができるようになりたいと思う生徒の方が、数学の正答率が高い傾向がみられる。
- 数学の授業で学習したことを生活の中で活用できないか考えたり、暗算したりする生徒の方が、数学の正答率が高い傾向がみられる。
- 数学の問題の解き方分からないときにあきらめずに考える生徒の方が、数学の正答率が高い傾向がみられる。

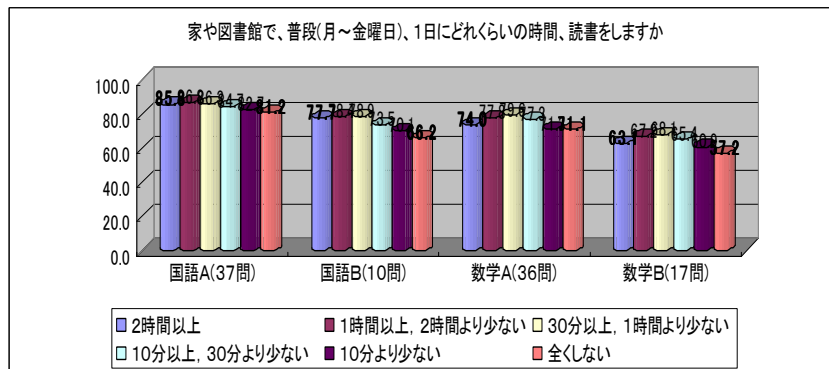
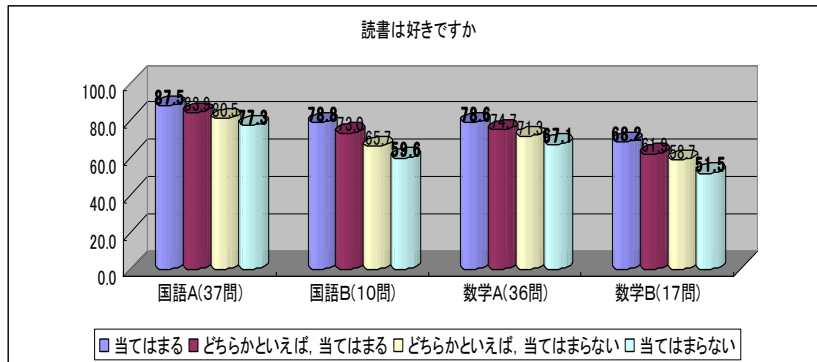




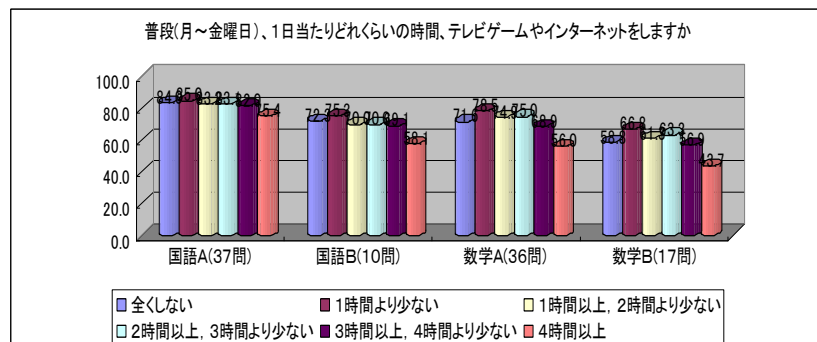
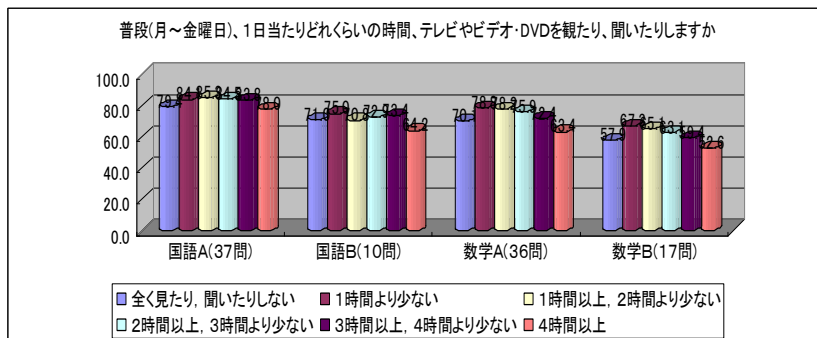
* 学習時間等

- 学校の授業以外で勉強する時間が長い生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。
- 家で学校の宿題をする生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。
- 読書が好きな生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。
- 家や図書館で、普段から1日当たり10分以上読書する生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



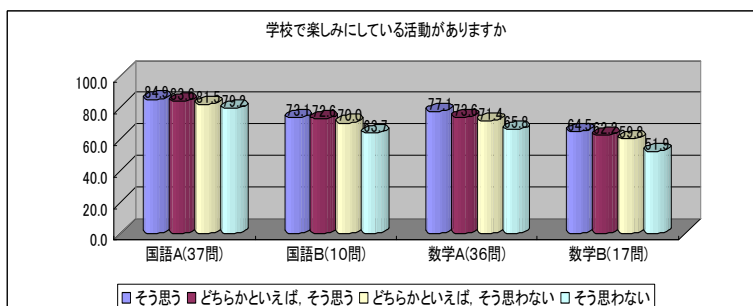
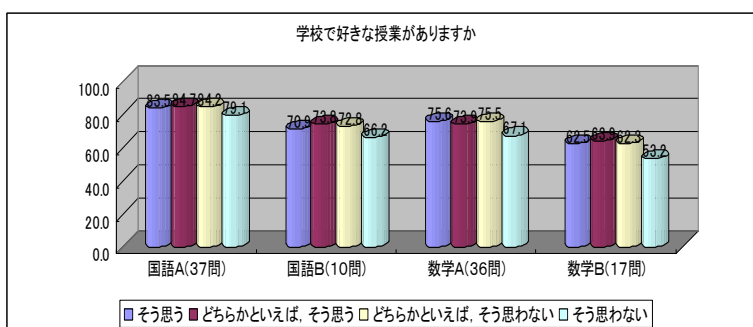
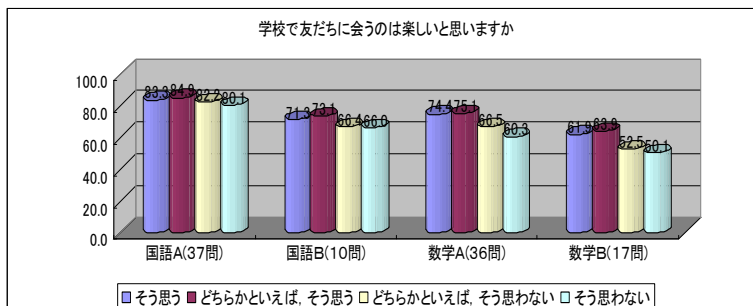


○ テレビやビデオ等を観る時間が短い生徒、テレビゲームやインターネットをする時間の短い生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



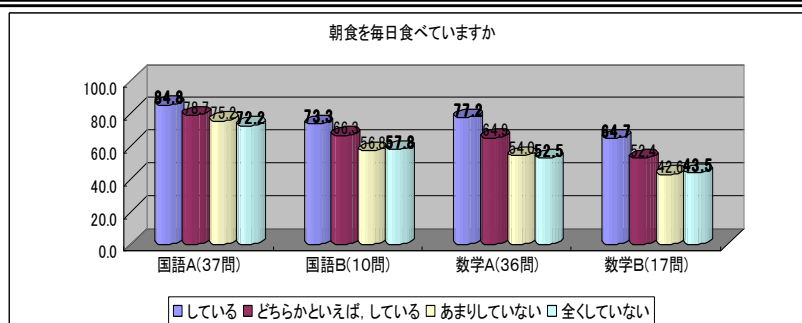
* 学校生活

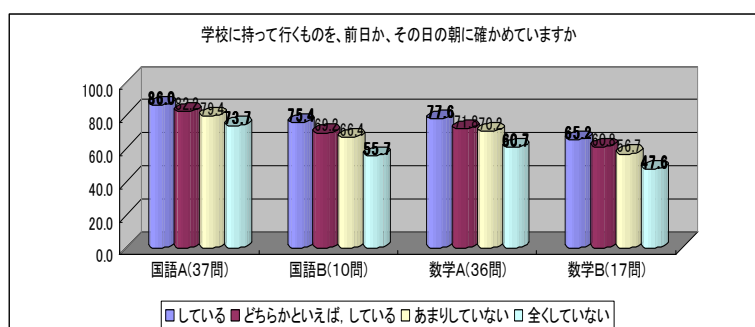
○ 学校で楽しみにしている活動がある生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



* 基本的生活習慣

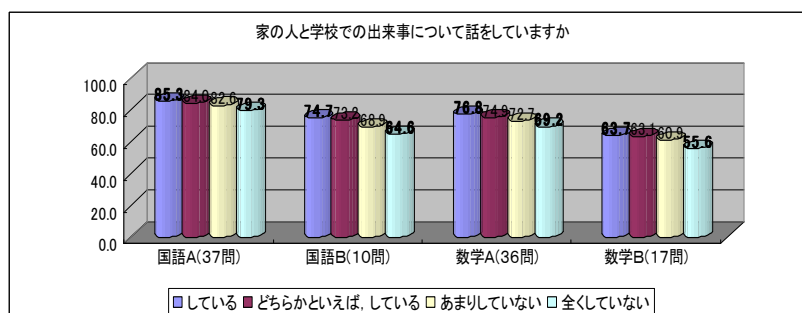
○ 朝食を毎日食べる生徒、学校に行く前に持ち物を確認する生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。





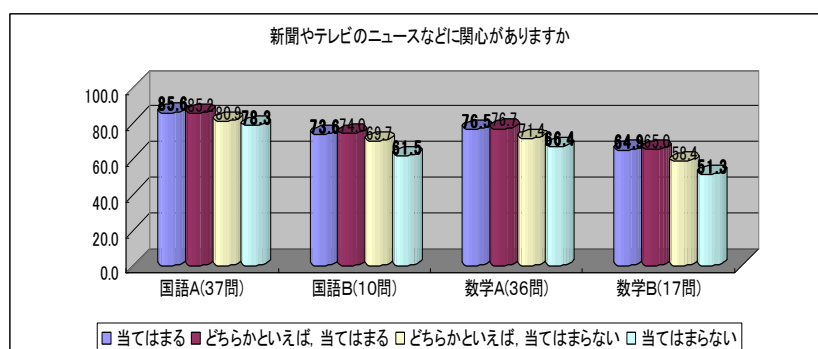
* 家庭でのコミュニケーション

○ 家の人と学校での出来事について話をする生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



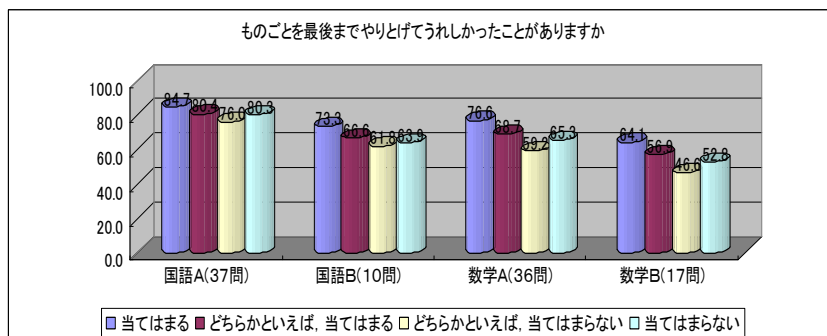
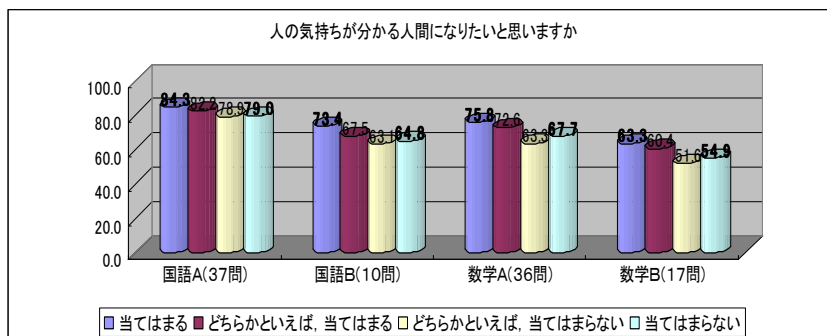
* 社会に対する興味・関心

○ 新聞やテレビのニュースなどの関心がある生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。

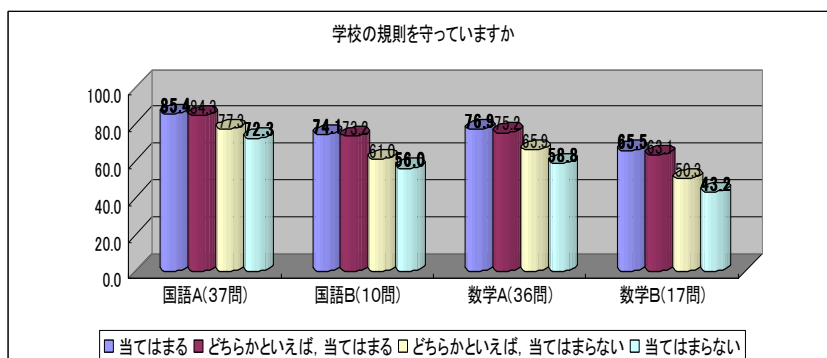


*** 自尊感情・規範意識等**

○ 人の気持ちが分かる人間になりたいと思う生徒、ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



○ 学校のきまりを守っている生徒の方が、正答率が高い傾向がみられる。



お わ り に

川西市教育長 村 木 修

川西の教育を進めていくキーワードは、「学びの協働～人間知を育む“学びの場”を～」です。人間知とは、人間らしく生きるための智慧のことです。人間らしい心を持ち、人間らしく振る舞い、考える人のたくさんいる、そんな街にしたいのです。

そんな街の空気の中で、明日の川西を担う子どもたちが健やかに育まれることを願っています。今、私たちおとなが何をすべきか。その一つとして、子ども個々に、しっかりとした生きる力を育てること―学力向上―が求められています。これからの激しい変化が予想される社会においては、一人一人が困難な状況に立ち向かっていかなければなりません。教育は、主体的・創造的に生き、未来を切り拓（ひら）くたくましい人間の育成を目指し、直面する課題を乗り越えて生涯にわたり学び続ける力を培っていくことが必要になってきています。

人間として生きていくために、子どもたちに基本的に求められる学力として、[確かな学力]があります。[確かな学力]とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものです。「習得型学力」である基礎的・基本的な知識・技能と「探求型学力」である、自ら学び自ら考える力、この両者は、本来相互にかかわりながら補強し合っていくものであり、[確かな学力]を育む上で、両者を総合的かつ全体的にバランスよく身に付けさせ、子どもたちの学力の質を高めていくという視点が重要です。

本年度より、「全国学力・学習状況調査」が実施されることになりました。小学校6年生と中学校3年生の国語と算数・数学という特定教科ではありますが、川西市の子どもたちの学力や生活習慣等をより正しく把握することが可能です。把握された実態から、これまでの取り組みを振り返るとともに、子どもたちの育ちをより強めたり、課題を改善したりする方策をさらに検討していこうと動き始めています。具体的には、「川西市基礎学力向上検討委員会」を組織し、小中学校教科幹事会と関連させていくことで、各小中学校と双方向につながるシステムを構築し、学力向上のための方策を実現しようと努めていくものです。

先日、市内中学校の卒業証書授与式に参加しました。一人一人の凛々しい姿を目の当たりにして、学校教育として9年間かかわることの責任、またこの子たちが明日の川西を切り拓いていってくれるだろうという希望を改めて感じました。これからも、市民の声に耳を澄ましなが、学校教育の責務を果たしていく決意を新たにしております。

学力を育成することは、学校教育の基本的な役割ではあります。それだけでは十分ではないことも、今回の調査結果からよみとれました。これからも、家庭・地域・学校の協働の中で、地道な取り組みを通して、川西の子どもたちを育んでいきたいと考えます。

それが、人間らしい心を持ち、人間らしく振る舞い、考える人のたくさんいる街づくりに繋がっていくと信じて・・・。